M.K.ガーンディー著　田中敏雄訳注

『ガーンディー自叙伝
―真理へと近づくさまざまな実験―』（全二巻）

（平凡社東洋文庫）

菜食を貫き粗末な衣を纏いインド各地を歩き回った裸足の聖者。「不服従運動」「非協力運動」の指導者。非暴力を掲げたインド民族独立の指導者。ガーンディーと聞いてそういった偉大な聖者、指導者像を思い浮かべない人はいないであろう。マハートマーと称されるガーンディーについて私が抱いていたイメージも前述のような偉大な聖者としての姿（もちろんそれは全くその通りであるのだが）であった。というより、インド史を専攻しているのでもなければ、ガーンディーの思想を研究しているのでもない私はそのようなガーンディー像しか持ち合わせていなかったというのが本当のところである。ほとんど何も知らずに本書と向かい合った訳である。したがって、本書の学問的価値や研究上の位置、ガーンディーの思想や後世に与えた影響などについて論じることはとうてい不可能である。そこで、一般に流布したガーンディー像しか抱いていなかった読者の一人として、以下、本書を紹介させていただくことをお許し願いたいと思う。

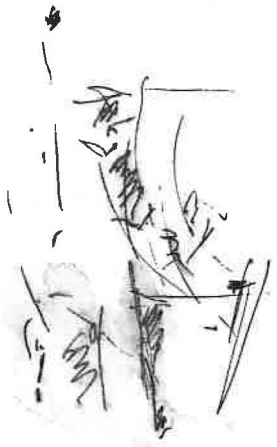
本書はガーンディーが一九二五年一一月二九日から一九二九年二月三日にかけてグジャラーティー語週刊誌『ナヴァジーヴァン』に掲載した自叙伝の全訳である。全体は五部に分けられ、第一部から第三部が第一巻に、第四・五部が第二巻に収められている。第一部には、ガーンディーの誕生から幼少期のインドでの暮らし、そしてイギリス留学を経て法廷弁護士となりインドに帰国するまで（一八六九年から一八九一年）が語られている。第二部ではインドに帰国したものの開業に失敗し南アフリカへ渡り、そこでアフリカ在住インド人の置かれている状況に直面し公的活動に従事しはじめていく過程（一八九一年から一八九六年）が、さらに第三部ではインドに一時帰国の後、再び南アフリカへ戻りアフリカ在住インド人のかかえる様々な問題に対処していく過程、そしてインドへの帰国とインドでの活動の開始（一八九六年から一九〇二年）が語られる。続く第四部では、再びインドを離れ南アフリカへ渡りアフリカ在住インド人に対する人種差別反対運動を指揮する過程から第一次世界大戦の勃発を経、インドへの帰国を決意する過程（一九〇二年から一九一四年）、最後の第五部では、インドに帰国してからの様々な活動、ストライキの指揮、地租免除要求、国産品愛用運動、非協力運動、国民会議への参加など（一九一五年から一九二〇年）が語られている。週刊誌への掲載という発表形態のため各部とも平均して五、六ページの節に分けられており、全体として年代順に出来事が語られているのであるが節ごとに一つのまとまった読み物として読むことも可能である。

この構成からわかるように、本書は七八歳で暗殺されたガーンディーが五〇代半ばから後半にかけてそれまでの人生を振り返って語ったものである。翻訳に負うところも多いのであろうが、語り口は平易で穏やかである。激しい心の葛藤や溢れるばかりの情熱、闘争の様子を語る時でさえその淡々とした語り口は変わらず、けして声高になったり語気を荒げたりしない。それがかえって様々な困難、理不尽さに確固として立ち向かってきたしなやかな強さを感じさせる。さらに、自らを包み隠さず語ろうとする真摯な姿勢がいたるところに表れており、過去の行動

に対する自己弁護や自己正当化とは無縁である。誰でも過去の恥ずかしい出来事やあの時こうしていればという後悔の念についてはあえて語りたくないであろうが、特に第一部ではのちの「マハートマー」の姿からは想像できない様々なエピソードが語られている。幼児結婚、好奇心に駆られての喫煙、盗み、さらにイギリス留学中の紳士趣味――夜会服にシルクハット、バイオリン、ダンス――、などなど…。ガーンディーの誠実さが伝わってくる。おそらく現時点から過去の自分を真摯に照査しようとするガーンディーのまなざしを遮るものは何もなかったのであろう。それは、序文でガーンディーがこの自叙伝を執筆するにいたった経緯を語り、そこで自らが執筆しようとしているものは自叙伝という体裁を取ってはいるが自らが行った真理への実験の物語であると定義していることから生じたまなざしであるのであろう。ガーンディーにとって生きることは真理の追求であった。

私は自分の過ちや罪を読者にすっかり伝えられるものと期待しています。私は真理の科学的実験について述べたいのです。

「序文」でこう語った姿勢は最後まで貫かれている。

宗教的実践に関して、サッティヤーグラハについて、闘争の際の非暴力や断食について、そのどれもがガーンディーの真理へと近づくための実験であった。そして、その真理は一人よがりではない神に支えられた真理であり、神の存在があるゆえに常に自己を相対化しえた。であるから、ヒンドゥー教への深い信仰に支えられ、自らの信仰が揺らぐことはないが、他の宗教への拒絶、排除には結びつかない。かえってキリスト教やイスラム教を学ぶことで宗教的な探求心を深めている。こうした何事においても真摯に向き合っていく姿、試行錯誤を繰り返し努力する姿、それはまさしく「人」の姿である。しかし、実際のところ「人」は真理に近づくためにそのような生き方を貫いていけるだろうか?そして今、そのように生きているかと問われたら「はい」と返事ができるであろうか?私はできない。だからこそ、本来「人」はここまで真摯にひたむきに生きることができるのだということを示したガーンディーに人々は胸を打たれ、そこに「聖」なる姿を見る。ガーンディーが成し遂げたこと、そこに彼の偉大さを見ることは簡単である。だが、本書には結果よりも迷い苦悩しながらも真摯に歩み続けた等身大の「人間」ガーンディーの姿があふれている。その姿に親しみと感動を覚え、そこにかえって「聖」なる姿を見てとることができるのである。

（菊池陽子）